

【実践報告】

**聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部における
授業開放週間 (オープンウィーク) とピアレビューの試み**

矢倉 千昭, 田島 明子, 根地嶋 誠

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部 FD 委員会

**Implementing a Trial “Open Class Week” for Peer Review
Observers in the Seirei Christopher University School of
Rehabilitation**

Chiaki Yagura, Akiko Tajima, Makoto Nejishima

Faculty Development Committee, School of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

1. はじめに

大学教育におけるファカルティー・デベロップメント (FD) は教育力向上を展開するうえで重要な活動であり、聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部は定期的に FD 勉強会を行うなど、積極的に FD 活動に取り組んでいる。本稿は、2014 年度から 2015 年度の間、リハビリテーション学部 FD 委員会が取り組んできた活動報告で、リハビリテーション学部 FD 勉強会でのピアレビュー、オープンウィークに関する解説、2014 年度から実施した授業開放週間 (オープンウィーク)、2015 年度から実施したピアレビューの実施方法と結果についてまとめたものである。

2. ピアレビューについて

近年、大学教育における授業改善の方略のひとつとして、ピアレビューが行われている。中央教育審議会による答申では、「授業内容を公開するなど、教育・研究指導の内容を同一学科内の教員が評価できる仕組み (いわゆるピアレビュー) を導入することも効果的である。」と

しており、ピアレビューを実施する大学は増加してきている¹⁾。

ピアレビューという言葉自体は、研究者が学術雑誌に投稿した論文に対して行われる「査読」、つまり研究仲間や同分野の専門家による評価や検証のことである。授業改善のためのピアレビューについては、取り組む大学組織により様々な定義や解釈がある。たとえば、山口大学²⁾では授業を公開して授業研究会を開く活動としていたり、西垣³⁾は同僚である教員が相互に授業を参観し合い評価し合うものとしたり、授業改善のためのピアレビューは決まった一つの方法を指すものではない。

ピアレビューとして授業を公開する場合、実施目的と方法は様々である。溝上と田口⁴⁾は、授業公開の目的を 5 つに分類した (図 1)。また、公開授業をどの授業で、どのタイミングや期間で実施するかについては、一つの授業を継続的に公開する、複数の授業を同時に公開する、公開を恒常的に行う、公開週間を設ける、などがある。さらに、単に授業を公開するのみならず、公開した授業について授業研究会を実施する場合がある。研究会を実施する時期についても、授業終了直後に実施、または日を改めて実施す

- | |
|--|
| 1. 啓蒙
イベントを実施することにより、FD への意識を高め、ピアレビューの普及促進をねらう |
| 2. モデル伝達
モデルとなる授業を公開することで、参加者が良い授業の条件や授業技術を学び取る |
| 3. ファカルティ連携
同一分野内で授業を見せ合い、授業内容を講義間で調整する |
| 4. 反省 reflection
自分の授業について、大学教育センターなどで意見を聞き改善の糸口を探る |
| 5. ネットワーク志向
共同体を形成し一緒に問題を乗り越える |

図 1. 公開授業の類型化 (溝上と田口, 2003)

る場合がある。

ピアレビューは、各大学で定義や実施方法が異なるが、共通することは教員の査定のためではなく、よりよい授業にする、教育を改善するという点である。西垣³⁾は、各大学に“ふさわしい”FDが望まれると述べ、各大学が抱えている問題点を分析し、それを解決する道筋を見通す必要があるとしている。やらなければ外部からの評価が下がるという理由で実施するのではなく、“ふさわしい”ピアレビューを十分に検討した上で、実施する必要がある。

3. ピアレビューの実施上の問題点

FD活動およびピアレビューにおける現状として、FDの形骸化、実施者および参加者の負担感や徒労感の増加、事務手続きの増大、参加教員の固定化および減少が問題点として挙げられている。これらの背景として、力づくで評価制度を導入することが指摘されている⁵⁾。日本の大学では、授業に関して同僚同士での批判的指摘や提案を行う文化がまだ醸成されていない⁶⁾。授業をする教員は、自身の授業を見られることに抵抗を感じるかもしれないし、授業に参加する教員は、どのような観点で評価すればよいのか、どのような心構えで参加すればよいのか養われていないとなると成果をあげることができず、負担になるだけで終わる可能性がある。加えて、ピアレビューを実施する準備として、参加者への案内、シラバスおよび当日の指導案の作成と提出、配布予定の資料準備など多岐にわたる。ピアレビューの運営による事務手続きの増大は、教員の負担にもつながる。ピアレビューへの参加を自由にした場合は、参加者は興味を持つ一部の者に限られ、回数を重ねるごとに参加者の減少または固定化されてしまう。

ピアレビューの実施方法や目的などを十分に理解しないまま強制的に実施すれば実施者や参加者に実務的にも精神的にも多大な負荷となり、実施すること自体が目的になってしまいかねない。

4. ピアレビューの実施にあたって

これまでに報告された課題や問題点から、ピアレビューを実施するには、いくつか考慮すべき点がある。ピアレビューを実施する目的と内容を周知し、教員全員が理解する必要がある。ピアレビューについての理解不足や抵抗感があるうちは、無理な実施は反感を買うだけである。まずはピアレビューの理解を促す取り組みをし、ハードルの低い方法で開始することが発展につながると考えられる。

川口と横溝⁷⁾は、それぞれの授業は授業担当者のエネルギーと努力の結集であり、大切に取り扱われるべきだと述べている。ピアレビューの最大の目的は授業を改善することであり、授業または教員に点数を付けたり善し悪しの判断をするのではない。佐藤⁸⁾は、直接的に互いを「評価」するより互いに「支援」を促すという意味にピアレビューを「翻訳」する必要があると提言している。ピアレビューは、他者の授業を参観することにより自身の授業を振り返ること、どのような点を改善すればよりよい授業となるのか支援するという意識が必要である。

ピアレビューの実施においては目的および実施方法について教員相互の意思統一を図る必要がある。実施方法はできるだけ簡易で、ハードルを高くしないことが重要である。中島⁹⁾は、ピアレビューを実施するとき考慮したこととして、意味のあるFDの実施、参加者だけでな

く実施者への負担が小さいこと、全員参加すること、小さく始めることだと報告している。ピアレビュー導入にあたって、運営側は参加しやすく段階的に発展できる方法を立案し、その上で勉強会や研修会などを繰り返し実施して目的や方法について理解を促すことが必要である。

ピアレビューはFD活動の一環であり、極論的には個々の教員が授業を改善できるのであればピアレビューでなくてもよいかもしれない。しかし、教員が個人の力で授業を改善することには限界がある。ピアレビューのデメリットとして他者の目にさらされることには抵抗感があるが、メリットとして自身で気づかないことが他者の評価によって明らかにされるなど、メリットがデメリットを上回るはずである。山口大学²⁾では、「今年、うまくいった『いい授業』は、来年そのまま使えるとは限らない」、「要は、教員自身が常に謙虚な気持ちで学び続けること」、「改善し続ける姿勢を持つこと」が大事な観点であると述べている。ピアレビューに対する教員の意識改革を促しつつ、小さい取り組みを継続していくことで、ピアレビューが浸透し授業改善につながるものと考えている。

5. 2014年度の授業開放週間（オープンウィーク）の取り組み

本来、大学教員にとっての授業改善は、毎回、または年度ごとに考えさせられる課題であり、改善の糸口を考え、試行錯誤を行っているのが必然であり、そのヒントを得たいと考えていると推測される。授業改善の手助けとして、個々の教員が内省的に授業を振り返り、改善するヒントを得る仕組みと機会を作ることがFD委員会の役割であるが、他大学のピアレビューの報告を踏まえると業務負担のバランスを考え、継

続的に授業改善を検討できる状況を提供する必要がある。佐藤^{8, 10)}は、教員の授業改善を目的としたFD活動の目的は誰かを「評価」することではなく「授業改善」であるとし、授業相互観察を中心とする授業開放週間（オープンウィーク）を試み、主観的ながらも、その変化に発展的で前向きな変化の感触を得たことを報告している。授業観察は単なる授業参観（見る）ではなく、自らの授業と比較することで振り返り、反省し、さらに改善点を知る場であるといえる。他人を評価、批評するうえでは、自らの内省力を高めることが重要であり、ピアレビューを実施する前に自己内省力を高める活動が必要であると考えていた。

これらのことを踏まえ、本学リハビリテーション学部では、2014年度、「リハビリテーション学部授業相互観察による教育力向上週間」を設け、学部教員の授業観察を実施し、自らの授業改善に生かし、相互観察を定期的に行い、継続的なFD活動に結びつけることを目的に実施した。

2014年度のオープンウィークの対象は、リハビリテーション学部常勤の教員27名で、ゲストスピーカーや非常勤講師は対象から除外した。また、他学部の学生が一緒に受ける授業も観察の対象から除外した。オープンウィークのルールは、①原則としてすべての授業を開放する、②事前に観察する連絡をしなくてもよい、③観察時間は短くてもよい、④複数の授業を観察してもよい、⑤教室の外（廊下）から観察してもよい、⑥事後にお礼や挨拶をしなくてもよい、こととした。

オープンウィークは、秋 semester の2014年11月17日（月）～28日（金）の2週間に設定した。学部FD委員会は、オープンウィークにおける授業見学を促すため、9月の学部教

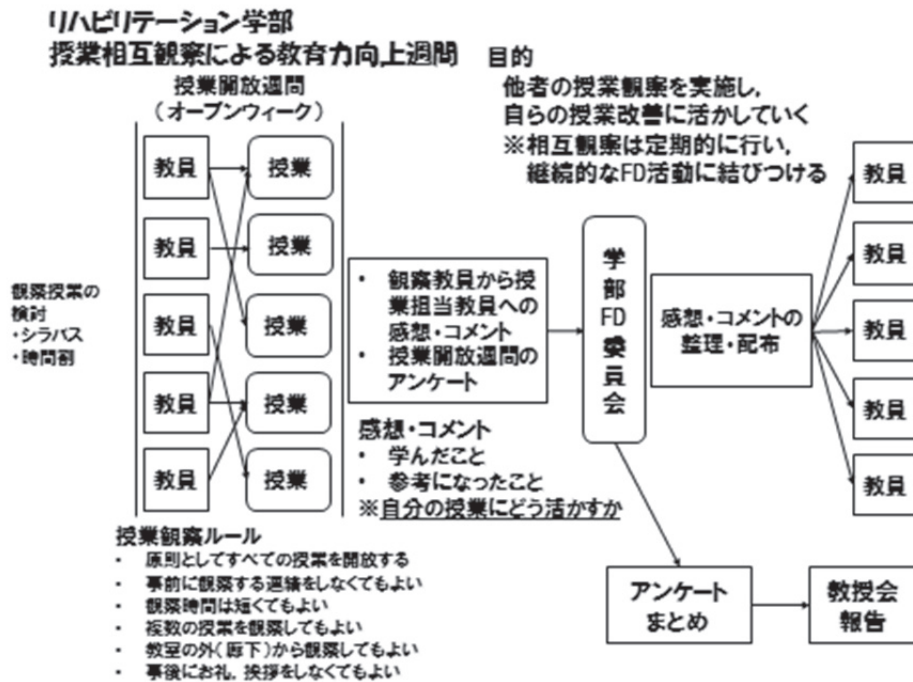


図 2. リハビリテーション学部授業開放週間 (オープンウィーク) の概要

授会終了後のFD勉強会にて, オープンウィークについて概念図を用いて説明を行った(図2)。次に, 学部FD委員長は, 学生に対してオープンウィークの概要, 授業に支障がないように教員が見学するのでいつも通りに授業を受けるようお願いのメールを一斉配信した。オープンウィークが開始される1週間前に教員に授業観測した教員へのコメント用紙(図3), オープンウィークのアンケート用紙を配布した(図4)。コメント用紙には, 否定的なコメントを記載せず, 自分の授業にどう生かすかという視点で, 授業を観測したことによって学んだ, 参考になった, ことのようにポジティブなコメントを記載するようお願いした。オープンウィークの終了後, コメント用紙とアンケート用紙を回収ボックスに投函してもらい, 学部FD委員がコメント用紙を整理して封筒に入れて観測された教員に配布した。アンケートの結果については, リハビリテーション学部教授会終了後の

FD勉強会で報告した。

リハビリテーション学部におけるオープンウィークのアンケート結果は以下の通りである。教員27名のうち21名(77.8%)からアンケートの回答があった。オープンウィーク中に授業観測をした者は21名中16名(76.2%), しなかった者は5名(23.8%)であった。授業観測をしなかった理由は, 2名が実習訪問や「出張などで不在であった」, 3名が「授業や業務で時間がなかった」, であった。授業観測した16名の見学した授業数と観測時間は, 授業数が平均1.9回(最小1回, 最大4回), 観測時間が平均20.6分(最少5分, 最大80分)であった。総観測件数は30件であったが, 観測した教員に対するコメント用紙の提出件数は25件(83.3%)であった。コメントの内容は提示しないが, 批判的な内容はなかった。観測されたときの授業への支障に対する回答は, 21名中, 支障はあった2名(9.5%), 支障はなかった13

見学日時 _____ 年 _____ 月 _____ 日 _____ 時限

授業していた教員 : _____

【感想・コメント】 学んだこと、参考になったこと。
(ポジティブなコメントをお願いします。)

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部
FD 委員会

図 3. 授業開放週間（オープンウィーク）のコメント用紙

名 (61.9%), 観察されなかった1名 (4.8%), 未回答5名 (23.8%) であった。支障があったと回答した教員の回答は、2名とも「学生の集中力（注意力）に影響した」, であった。2週間のオープンウィークについての回答は、短い2名 (9.5%), ちょうどよい15名 (71.4%), 長い2名 (9.5%), わからない1名 (4.8%), 未回答1名 (4.8%) であった。

オープンウィークに対する感想と意見は18件あった。「参考になった」, 「授業に取り入れてみた」, 「自己学習として良い取り組みだと思

う」, 「自らの指導を振り返る良い機会だと思う」, 「同じ学科でも他の教員の授業を見学する機会があまりないのでオープンウィークが設定されると行きやすい」, 「他学科の授業がどのようなことをされているのかを見学できて興味深かった」, 「ピアレビューをするならこの形で行うと負担感が少なく継続できると思う」, 「よい機会なので継続してほしい」, という前向きな意見が8件あった。また、ピアレビューに近い積極的な意見として、「事前に授業の日程や内容を公表してはどうか」, という意見が3件あっ

授業開放週間 (オープンウィーク) のアンケート

1. 授業開放週間の間に授業見学しましたか?
(はい ・ いいえ)

2. 見学した授業数と平均見学時間を教えてください。
例: 授業数 4 つ, 平均 10分 程度
(授業数 つ, 平均 時間・分 程度)

3. 授業を見学しなかった理由を教えてください。(1. で いいえ と答えた者のみ)

4. 見学されることで授業に支障はありましたか? あった場合は内容を教えてください。
支障は (あった ・ なかった)
・支障があった内容→

5. 今回の「授業開放週間」は2週間でした。期間はどうか?
(短い ・ ちょうど良い ・ 長い)

8. 今回の「授業開放週間」の試みについて、ご感想、ご意見をお願いします。

ご協力ありがとうございました。

図 4. 授業開放週間 (オープンウィーク) のアンケート用紙

た。一方、「学内業務や出張のために授業観察ができなかった」、「あまりできなかった」という意見が4件、「教室の扉が閉じられていた」、「教室が前からしか入れられないために入るのにためらった」、「授業が休講のために授業観察ができなかった」という意見が2件、「授業観察を受ける立場の意見として、学生の意見をきいてはどうか」という意見が1件であった。

6. 2015年度のオープンウィークの実施

昨年度秋 semester に始めたオープンウィークであるが、2015年度春 semester においても継続して実施した。新任教員が数名いたため、リハビリテーション学部FD勉強会において、オープンウィークの目的、概要、実施方法について事前に説明を行った。実施期間については、2014年度秋 semester 時は2週間であったが、2015年5月11日(月)～5月29日(金)の3週間に設定した。その理由として、リハビリテーション学部教員にとってこの時期は中間授業評価の実施時期や臨床実習の訪問時期と重なるため、教員全員の授業観察が可能となるように長めの期間を設置した。実施方法は昨年度と同様であったが、今回は、教員の全員参加をお願いし、参加状況を確認するため、コメント用紙に授業観察者の氏名の記入欄を設けた。

2015年度春 semester におけるオープンウィークについてのアンケートの結果の概略を以下に説明する。リハビリテーション学部教員常勤の教員28名中26名(92.9%)が参加した。見学した授業数は1～2つで6割程度、15分以内の見学が半数であったが、30分以上の見学も2割程度いた。見学してよかったこと、参考になったことについては、多くの教員が「今後の自身の授業に活かせる」と感じており、具

体的には、「授業の進め方」、「コミュニケーション方法」、「グループワークの方法」、「効果的なプレゼンテーションの方法」等について役立ったという意見であった。「授業に支障があったか」という質問に対してはほとんどの教員が「なかった」と回答しているが、授業を観察されることに対する心理的抵抗感を感じている教員もいた。また、実施期間についてもほとんどの教員が「ちょうどよい」と回答していた一方で、実施時期について「いつでも行ってはどうか」という意見があった。

7. ピアレビューの実施へ

2014年度秋 semester、2015年度春 semester に実施したオープンウィークは、他教員の授業を観察し、自身の授業改善に役立てることを目的とした活動であった。2015年度春 semester におけるオープンウィークの振り返りをリハビリテーション学部FD勉強会にて行ったとき、他者による評価によって自分自身の授業について気づきを得られるような他者評価型のピアレビューの実施によって、より一層の授業改善が期待できるのではないかという意見があった。リハビリテーション学部FD委員会では、ピアレビューについて検討を行い、素案をまとめ、教授会において教員に提示、意見を伺い、最終的な実施要綱、実施手順、必要なシートを作成した。

ピアレビューの手順は図5に示す。ピアレビューを受けたい教員はレビューアになってほしい教員に個別にお願いし、了承が得られたら、リハビリテーション学部FD委員長に報告する。FD委員長は、レビューアの教員に評価票(図6)を渡し、ピアレビューを受けたい教員にはリフレクションペーパー(図7)を渡す。

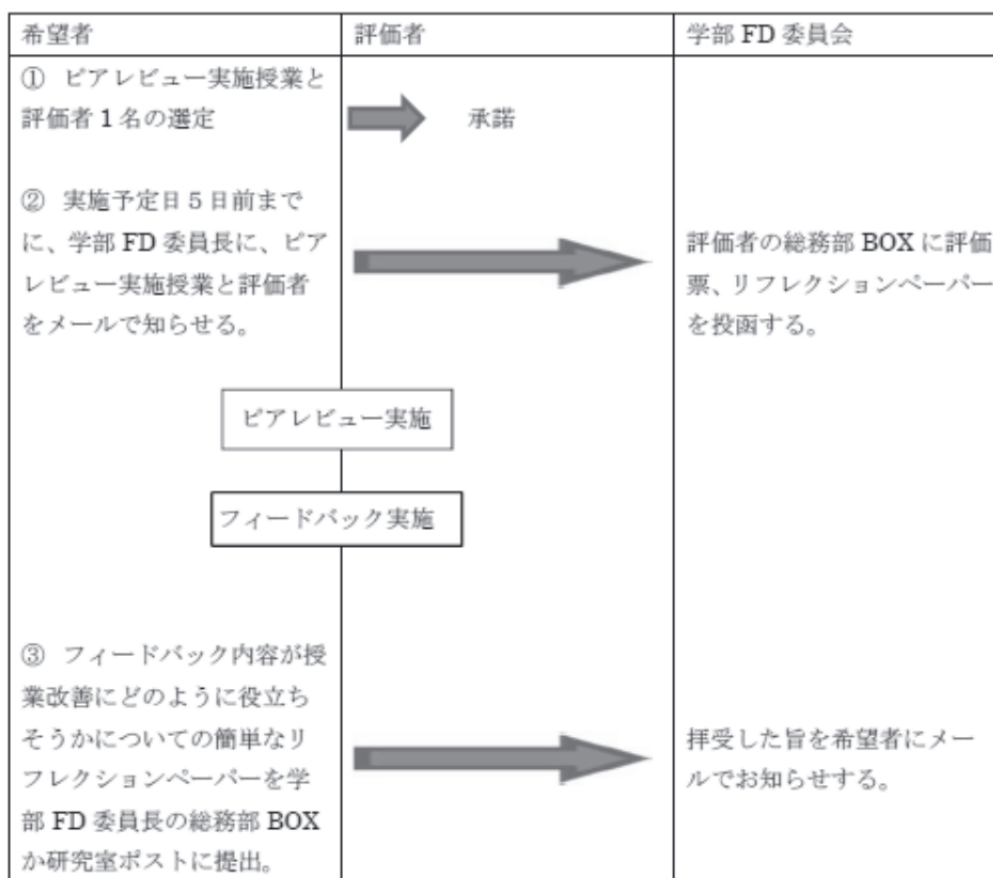


図 5. ピアレビューの実施手順

ピアレビューを受ける教員とレビューアの教員は観察する授業の日程を調整し、ピアレビューを実施する。ピアレビュー後、レビューアはピアレビューを受けた教員にフィードバックを行い、ピアレビューを受けた教員は、リフレクションペーパーにフィードバックを受けた内容とこれから授業にどのように役立てたいのかを記載し、リハビリテーション学部 FD 委員長に提出するという手順で行うことにした。

2015 年 10 月時点での実施途中であるが、3 名の教員から希望があり、ピアレビューの実施を進めている。

8. まとめ

本学リハビリテーション学部では、2014 年

度秋 semester, 2015 年度春 semester にオープンウィークを実施し、さらに同年秋 semester からピアレビューを実施するようになった。オープンウィークの参加率は、2014 年度が 77.8%, 2015 年度が 92.9% と高くなっている。授業改善には、教員の自己内省力が最も重要である。リハビリテーション学部 FD 委員会は、オープンウィークが個々の教員が内省的に授業を振り返り、改善するヒントを得る機会となり、継続的に授業改善を検討する FD 活動になりつつあると考えている。今後、リハビリテーション学部全教員が参加するように進めたいと考えている。

一方、授業改善では、他者から客観的な評価を受け、改善した授業が効果的であるのか検討することも必要である。本学では学生の授業評

評価票（評価者の評価視点の参考として使用してください）	
評価項目	コメント
① 学生の様子（意欲的か、興味・関心を持っていたか）	
② 説明の仕方（わかりやすさ、聞き取りやすさ）	
③ 学生とのやりとり（学生の理解や反応の把握、興味・関心を引き出していたか）	
④ 印象（立ち居振る舞い、身だしなみ、表情等）	
⑤ 事前・事後学修の指導	
⑥ その他	

図 6. ピアレビュー評価者のコメントシート

価を行っており、評価結果から授業改善のヒントを得られるかもしれない。しかし、授業評価は数値的な分析ができるが、授業改善を求めるコメントが少ない場合、具体的な授業改善につながりにくいことがある。客観的に授業を振り返る手法としてピアレビューは有効な手段であるが、ピアレビューをイベント化すると、実務的、精神的な負担が大きくなり、ピアレビューの実施そのものが目的になりかねない。リハビリテーション学部では、ピアレビューをイベント化せず、オープンウィークの授業観察、学生の授業評価から授業改善を検討したい教員、新たな授業方法を検討したい教員が同僚の教員1名にレビューをお願いし、ピアレビューを受けることによって客観的な評価を受けられるようにした。今後、このピアレビューの有効性について検討していく必要がある。

これまでの過程を踏まえ、リハビリテーション学部FD委員会では、オープンウィークとピアレビューを交互に実施するように進めたいと考えている。同僚の教員を評価する、または同僚の教員から評価されるうえで、教員一人一人の内省力を高めることが肝要である。オープンウィークによって自己内省力を高め、その内省力から他者評価力を向上させ、また授業改善の試みを同僚教員の評価によるピアレビューで確認し合い、さらなる教育力の向上を目指せるような環境を提供していきたい。

文献

- 1) 中央教育審議会：新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－ 答申，平成17年9月5日，文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05090501.htm
- 2) 山口大学FDハンドブック制作WG：授業研究会の進め方 山口大学FDハンドブック 第2部 http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/FD_handbook2.pdf
- 3) 西垣順子：授業のピアレビューを中心とする教育改善の試み. 京都大学高等教育研究 第10号：33-43, 2004
- 4) 溝上慎一，田口真奈：授業者の成長を促す大学の授業参観方式. 日本教育工学雑誌, 27：165-174, 2003
- 5) 荻谷剛彦，諸田裕子：「教員評価から見えてくるもの」荻谷剛彦・金子真理子編著『教員評価の社会学』岩波書店，2010
- 6) 細川和仁，姫野完治：大学における授業参観と事後検討の現状と課題. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要第30号：2008
- 7) 川口義一，横溝紳一郎：成長する教師のための日本語教育ガイドブック（上）. ひつじ書房，2005
- 8) 佐藤有理：授業相互観察を中心とするオープンウィークの試み（1）－ピアレビューの検討から授業改善支援へ－. 日本研究センター教育研究年報, 1：66-73, 2012
- 9) 中島平：研究大学の小部局における効率的・効果的なFD活動の実践：教員同士による5分間相互コンサルテーション. 京都大学高等教育研究, 15：59-66. 2009
- 10) 佐藤有理：授業相互観察を中心とするオープンウィークの試み（2）－第一回〈教室開放週間〉実施後のアンケート結果報告と課題－. 日本研究センター教育研究年報, 2：11-17, 2013

Implementing a Trial “Open Class Week” for Peer Review Observers in the Seirei Christopher University School of Rehabilitation

Chiaki Yagura, Akiko Tajima, Makoto Nejishima

Faculty Development Committee, School of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University